



特集

北海道に根差した芸術・文化を知り、
現代アーティストと市民が交流する文化塾
—— サッポロ・アートラボ (SALA)

北海道・本のある風景

本と喫茶 NOMAD BOOKS

店主 森田 千琴さん

Book Stories 本づくりのさきにあること——。

子どもの可能性を広げる絵本読み聞かせ活動の普及に取り組む

こども未来 with 北海道 代表 大澤 俊信さん

ほっかいどうの本 『マリモ大全』 北海道新聞社

『本の力でまちづくり —北海道恵庭市からの発信—』 中西出版

『札幌線 旅立ちの汽笛』 共同文化社



「SALA」のプログラム・フライヤーはデザイナーの玉本猛さんと市川義一さんが担当

特集

北海道に根差した 芸術・文化を知り、 現代アーティストと市民が 交流する文化塾 ——サッポロ・アートラボ(SALA)

2010年春に発足した民間の文化塾「サッポロ・アートラボ(略称・SALA)」は、「文化を読み、人と出会い、現代を知る」を活動の理念に、主に北海道で活躍する芸術家をより多くの市民に知ってもらうため、定期的なレクチャーを開催しているほか、顕彰制度をつくり地域の芸術・文化活動の支援にも取り組んでいます。絵画、彫刻、文学、音楽、書、建築など幅広いジャンルのアーティストと市民が交流する「文化のアgora(広場)」を目指す「SALA」について、代表を務める詩人で美術評論家の柴橋伴夫さんに話を聞きました。(文・写真/片山健一 取材日2026年5月28日、6月20日)

芸術家と市民が語り合う レクチャー

「SALA」の活動は、2010年4月30日午後7時、札幌市中央区のカフェギャラリー「ト・オン・カフェ」で開いた「レクチャー」から始まりました。レクチャーでは、道内を拠点に活動するアーティストや評論家、学芸員らが講師を務め、創作に関わる動機や思いなどを紹介したり、研究の成果を発表したりしま



6月20日に開かれた130回目のレクチャー

す。当初はほぼ毎月開催していましたが。

新型コロナウイルス感染症が蔓延した2021〜2022年度は中断しましたが、2023年度から再開し、札幌市中央区の大丸藤井セントラル7階のスカイルームに会場を移して、年6回のペースで開催しています。今年6月20日に開いたレクチャーが130回目となりました。

第130回のレクチャーは、市立小樽美術館の星田七重主幹学芸員を招き、小樽市で幼少・少年期を過ごした日本画家・福井爽人の生い立ちや作品の解説を聴きました。

ラピスラズリなどを用いた青色が印象的な福井氏の画風について、星田さんは「みなしごととして育ち、『敵性語』とされた時代の英語教諭だった父の境遇、厳しい冬の小樽への郷愁などが原点となり、もの悲しい風情があります」と説明します。

また、福井氏と俳優の梅沢富美男



「サッポロ・アートラボ」代表の
柴橋さん

がいとこであること、名前が「爽八（そうはち）」から「爽人（そうひと）」と、「さらに「爽人（さわと）」へと変遷した経緯など、本人との交流を通じて知った意外なエピソードに、受講者からは驚きの声が上がりました。

インドへの取材旅行を経て1998年に描いた代表作「門」は、「壮年期のエネルギーが全て込められた絵だ」という福井氏のコメントとともに、展覧会では、門の前に描かれた男を見つめ「この人は夫で、私に何かを伝えようとしている」と、会期中に何度も訪れては涙を流す女性がいたことなどを紹介し、「この絵が持つ力」の大きさを伝えました。



福井爽人氏の日本画の特色などを解説する星田さん

最後に星田さんは「日本画に洋画的な表現を取り入れた福井芸術の2010年以降の課題は、伝統的な日本画には無かった『光』であり、描こうとしているのは『生と死』だと思います」と締めくくりました。

講演後の意見交換では、柴橋さんが、福井氏の随筆集『紫の雨』の一部を読み上げ「散文でありながら、洗練された言葉で詩人のような表現をし、それが絵と一致している」と称賛したほか、日本画を描いている受講者は「北の空気を感じる作品群だと思えます」と感想を述べ、市立小樽美術館で福井氏の作品を観たという別の受講者は「青い色が吸い込まれるような恐さを感じるほど美しい



7月12日まで市立小樽美術館で開かれた福井爽人・福井時子日本画展で展示された代表作「門」



130 回目のレクチャー参加者による集合写真

「受講者も、講義内容によっていろいろな人たちが聴きに
来てくれて、交流できるのも
うれしいことです」と柴橋さ
んは言います。

1 回 90 分のレクチャーに、2 人の
講師が立つこともあるため、これま
でに 130 人以上が講義をしました
が、「2 回以上レクチャーした人は
ほとんどいません。私の知り合いだ
けでもまだまだ紹介したい人たちが
います」と柴橋さんが話すように、
画家や彫刻家、詩人・文学者、写真
家、作曲家、建築家など多彩な顔触
れが講師として登場しています。

柴橋さんは、長年にわたり
現代アートの企画展などを数
多く手掛ける中で、「作家の
考え方を直接聞きたいと
いうファンや市民がいて、作
家自身も作品について解説す
る場がほしいと思っている」
と気付き、北海道に現代ア
ートを根付かせ、その裾野を広
げるため、気軽にアートにつ
いて語り合える交流の場とし
てレクチャーを立案し、十数
人の運営委員と力を合わせ実
現しました。

「文化塾といっても面倒な
入塾の手続きはなく、興味の
ある講義を選んで事務局へ申
し込んでいただき、当日会場
で受講料（一般 1000 円、
学生 500 円）を支払うだけ
です。定員は最大 30 人ほどで
すが、空きがあれば飛び込み
で受講することもできます」
（柴橋さん）

運営委員の一人、グラ
フィックデザイナーの市川義
一さんは「いろいろなテーマ

第1回/谷口雅春+露口啓二「札幌アートワークへのまなざし」

「札幌アートワーク」へのまなざし、それが生起させたもの

- 講師=谷口 雅春（たにぐち まさはる）/ライター
1957年札幌生まれ。主な著作に『奇跡の音楽祭
札幌・PMFの夢』『千年の響き-正倉院楽譜復元
とアンサンブルオリジン』『札幌アートワーク』。
編集に『札幌アートワーク』など。
- 講師=露口 啓二（つぐむち けいじ）/写真家
1950年徳島生まれ。写真家。フレン写真製作
所代表。「現代日本写真/BLAC OUT」展に参
加。第35回東川賞特別賞。主な著作に『露口啓
二写真集』『札幌アートワーク』など。
- 会場=ト・オン・カフェ
札幌市中央区南9条3丁目2-1
マゼランハイブ1階
- 開催日時=2010年4月30日（金）
午後7時～午後8時30分



第1回講師 谷口雅春氏（左）と露口啓二氏（右）
テーマに対する両氏の深い印象が印象的であった。



第1回講義の贈答に先立って
サラ代表・柴橋氏から
お礼の挨拶と金の説明が
あった。

第1回のサッポロART LABO(サラ)のレクチャー
は、ライターの谷口雅春、写真家の露口啓二を講師
に迎えて、「札幌アートワーク」へのまなざしと題し
て、2010年4月30日（金）に行われた。あいにくの
小雨が降る中、席は定員をオーバーして満席状態
だった。熱気が場に満ちていた。

最初に「サラ」副代表・玉本猛から開会の挨拶
後、創立に係わった企画メンバーの紹介があった。
続いて代表・柴橋氏から、「多様化する文化を掘削
しながら、未来にむけて文化創造を担っている人
達を「束ねる」ことができる場づくりをめざしてい
る」と会を立ち上げた目的が表明された。

さて講師の二人は、昨年刊行した「札幌アート
ワーク」（北海道新聞社）の地下となった基本コン
セプトを紹介してくれた。それは千年単位でサッ
ポロを「風土誌」的に見つめ直すことだった。そし
て二人は、幾多の美術作品を文化地層、地形の組
型に戻りながら、読み取ることであった。またこの大
地の底には、豊かな水系が存在し、先人の生の営
みが現存していることに、私たちは深く覚醒し、さ
らには見えなくなっている「地形の記憶」に戻るべ
きであると感じたという。その一例としてモエレ沼
公園が、もっぱらイサム・ノグチの名により話題にな
っているが、この「地の古形」や「水の記憶」などが
忘れてしまっていないかと危機を表明されていた。
次に話題は、「土地を表象することはいかなること
か」、へと広がっていった。露口啓二が撮影した、幾
つかの映像素材が提示された。いうまでもなく北
の多くの地名は、アイヌ語が母語である。だが日本
語による漢字地名は、その地の霊やアイヌ人たちが
豊かに感受した「地形の特徴」などを、剥奪して
しまっている。露口啓二は、「沙流川」などにカメラ
を向ける時は、そのアイヌ語の原語が喚起する「

と心を傾けるという。この時、二人が大きな刺激を
受けた仕事を紹介していた。

1つは、旭川在住の考古学者・瀬川拓郎の視座と
いう。瀬川拓郎は、雄大な「1万年の景観史」を掘起
している。また歴史学者・保坂実の「ラディカル・オ
ーラル・ヒストリー」やオーストリアのデボラ・B・ロー
ズの「生命の大地」（お茶の水書房）を挙げていた。
共通したものがあるようだ。それは文字として書か
れた歴史ではなく、むしろ民衆が口で伝承してきた
ものや、大地が記憶したもの、立ち戻るべきだとい
うこと。私はそれを聞いていて、大きな誤りをし
てきたことを痛感した。人間は強制的に、かなり自
己勝手に自然や文化を「解説」してきたのではな
いか。かつてに水や土を汚染していきながら、今度
は「環境との共生」とかいう。なんと傲慢なことか。

谷口雅春や露口啓二は、書き手と写真家という風
に表現は違っても、普段は見えないものや
聞こえないものを、自分たちで感じ取り、表現し
ていくという姿勢が、この「札幌アートワーク」の
核になっているように思う。

二人が「札幌アートワーク」の地下となった基本
コンセプトを紹介してくれた。それは千年単位でサッ
ポロを「風土誌」的に見つめ直すことだった。そし
て二人は、幾多の美術作品を文化地層、地形の組
型に戻りながら、読み取ることであった。またこの大
地の底には、豊かな水系が存在し、先人の生の営
みが現存していることに、私たちは深く覚醒し、さ
らには見えなくなっている「地形の記憶」に戻るべ
きであると感じたという。その一例としてモエレ沼
公園が、もっぱらイサム・ノグチの名により話題にな
っているが、この「地の古形」や「水の記憶」などが
忘れてしまっていないかと危機を表明されていた。
次に話題は、「土地を表象することはいかなること
か」、へと広がっていった。露口啓二が撮影した、幾
つかの映像素材が提示された。いうまでもなく北
の多くの地名は、アイヌ語が母語である。だが日本
語による漢字地名は、その地の霊やアイヌ人たちが
豊かに感受した「地形の特徴」などを、剥奪して
しまっている。露口啓二は、「沙流川」などにカメラ
を向ける時は、そのアイヌ語の原語が喚起する「



立見が出るほどの混雑の会場は熱い興奮に包まれた。



熱心にメモをとる受講生の姿も見られた。

The Lecture Report of Sapporo Art Labo (SALA) 2010.4-2012.3





ウェブサイト
「SALA のブログ」

ウェブサイト「SALA のブログ」
(<http://sapporoartlabo.cocolog-nifty.com/blog/>) では、柴橋さんが記した初回から第102回までの講演録を掲載し、講師の活動内容が分かりやすく紹介しています。「このと

のレクチャーがあつて興味が尽きません。勉強になる貴重な場です」と話します。

北海道の 現代アート・文化を記録

「SALA」のレクチャーが際立つ点は、取り上げるジャンルの幅広さです。絵画、彫刻、写真、版画、文学、演劇をはじめ、音楽、書、生け花、盆栽、建築、さらに環境デザインやまちづくりにまで及びます。

2026年度の講師をみると、4月は市民出資の映画館・シアターキノの中島洋代表が、ミニシアターの歴史などについて講演し、5月は彫刻家の藤原千也さんが、樹木の内側から彫る作品の制作過程などを解説しました。

7月18日に札幌市在住の建築家・遠藤謙一良さん、8月15日に詩人・評論家の阿部嘉昭北海道大学名誉教授、9月19日には北見市在住の画家・伊藤彰規さんが、それぞれレクチャーする予定です。

ウェブサイト「SALA のブログ」

ころ、更新できていないのが、講師に申し訳なくて」（柴橋さん）と恐縮するものの、百件を超えるレポートは、北海道のアートシーンを読み解く、貴重な手掛かりとなります。

民間による顕彰 「北の聲アート賞」

「SALA」のもう一つの活動の柱は、「北の聲アート賞」です。道内でさまざまな文化的な活動に取り組み、貢献している個人や団体を顕彰することで、受賞者の「声」をよ



第11回北の聲アート賞で賞状を受け取る現代美術家の池田緑さん（山岸靖司氏撮影）

り多くの道民に届けようとの思いを込めて名付けたそうです。行政などの公的機関に頼らず、北海道の芸術文化を愛し、育てていきたいと願う民間の企業や団体、個人の賛助・支援で運営しています。

2012年に始まり、新型コロナウイルス禍の休止を経て2023年に再開、2025年で第11回を数えました。各年4〜6人（団体含む）を表彰し、累計で46人が受賞しています。個人以外では、炭鉱遺産を活用したアートプロジェクトに取り組むNPO法人炭鉱の記憶推進事業団



第11回北の聲アート賞贈呈式の会場・豊平館で演奏するピアニストの坂田朋優さん（山岸靖司氏撮影）

（第2回受賞）などが受賞しています。賞の選考は、「SALA」が委嘱する数人の専門家で構成する「北の聲アート賞選考委員会」が行います。

自薦・他薦などではなく、美術、音楽、建築、文学、書道などに精通した選考委員各自が、それぞれの専門分野から、受賞者を選出しています。受賞者のプロフィールや功績のほか、選んだ委員の講評も詳細に公開することで、独自性と透明性を両立した選考を行っています。

2026年度からは美術（ライラック賞）、音楽（ハルニレ賞）、建築（アウラ賞）、文学（ミネルヴァ賞）、書道（書の美賞）の5部門になります。

過去の受賞者たちは、「出身地の十勝をテーマにしてきた長年の仕事に認められてうれしい」（第3回受賞の美術家・橋原武正さん）、「彫刻を通じて人々の交流の場づくりをしたいと思ってきた。今後も頑張りたい」（第7回受賞の彫刻家・北村哲朗さん）、「地味な創作活動を取り上げていただき、うれしい」（第9回受賞の版画家・大島龍さん）といった喜びの声を残しています。

民間主体の顕彰制度のため、開催資金や賞金は全て、企業や個人の賛助金で賄っています。「受賞者はもちろん、仲間や家族がとても喜んでくれるので、やって良かったと思っ



小画集『シリーズ北の聲』の表紙。これまでに9巻発行している

ています。大変ですが、これからも続けていきたいですね」と柴橋さんは言います。

『シリーズ北の聲』 小さな画集

このほかにも「SALAアートのデックス」事業として、長年にわたり北海道のアート界で活発に創作活動を行っているアーティストを取り上げ、その人物像と作品を紹介するブックレット『シリーズ北の聲』（共同文化社）を2012年から発

行しています。

A5判36ページのコンパクトサイズ、本体価格1000円の手頃な作品集で、作品図版のほか、美術家たちのエッセー、柴橋さんの論評だけでなく、年譜や幼少期からの写真など作者の横顔も盛り込み、親しみを感じるように編纂しています。

これまでに梅津蕙さん、小笠原洋子さん、池上啓一さん、藤井高志さん、渡辺貞之さん、大林雅さん、西澤宏生さん、岸本裕躬さん、坂口清一さんの9人の画家を取り上げ、発刊しています。

ジャンルの枠にとらわれず 文化を発信

「SALA」を牽引してきた柴橋さんは、1947年に岩内町で生まれ、北海道教育大学札幌校で西洋史を専攻、とわの森三愛高等学校の教頭を経て、北星学園大学や札幌学院大学、酪農学園大学など道内各地の

大学で非常勤講師としてヨーロッパや東洋の美術史、さらには日本の文化史や文学などを教える傍ら、美術評論家としてイサム・ノグチや伊福部昭ら多くの評伝を手掛けています。現在、著作集『ミクロコスモス』（藤田印刷エクセレントブックス）を刊行中です。また、展覧会を自主企画し、各種の展覧会評などを専門誌や新聞などに寄稿するとともに、十代のころから詩作にも励んできました。

柴橋さんは、商業的でなく、行政

主導でもない、草の根の市民文化活動として運営する「SALA」のほか、1966年に創刊した同人誌『美術ペン』の編集などを通じ、長年にわたり札幌・北海道の芸術文化シーンを支えてきた存在です。

幅広い人脈から多様なジャンルのアーティストにスポットライトを当て、北海道の文化を創造する新たな担い手を発掘し、「北の芸術」の豊かさの可能性を発信し続けています。柴橋さんは79歳になった今も「これからも微力ながら、ジャンルの枠にとらわれず、北海道の文化の発展と活性化に取り組んでいきたい」と意欲を見せます。

「SALA」の今後について、柴橋さんは「運営資金の確保など難しい面もありますが、この活動が引き継がれ、長く続いてほしい」と期待するとともに、「いつになるかわからない、夢物語かもしれませんが、発足当時のサブ代表の玉木猛さんと構想した、北海道の芸術・文化を総合的に学ぶことができる『SALAアートセンター』を設立できれば」と話しています。



現代アートの普及に努める「SALA」の柴橋代表

お問い合わせ先

サッポロ・アートラボ「SALA」事務局
〒063-0061
札幌市西区西町北7丁目1番28号702号室
☎090-20511-8551
✉shihashi@sky.plala.or.jp
電子メール

本と喫茶 NOMAD BOOKS



おひとり様専用喫茶室のある書店
「自分と向き合う静寂の場」を提供

(文・写真／片山健一 取材日2026年7月5日)

札幌市の路面電車「西線6条」停留場から東方向へ1分ほど歩くと、緑色の外壁が目を引き「本と喫茶 NOMAD BOOKS」が現れます。ドアを開けると、白い壁の店内には南向きの窓から日の光が差し込み、深い茶色の天井と床が落ち着いた空間を演出します。店内の設計は、大学で空間デザインを学んだ店主の森田千琴さんが手掛けています。

新たな場所へと導いてくれる本と馬をモチーフに、本の森をデザインしたロゴ

本と喫茶 NOMAD BOOKS の外観

20平方メートルほどの売り場には、エッセーや詩歌、小説のほか、思想や心理学といった人文科学系の書籍などを中心に新刊本・古本合わせ約1500冊が陳列されています。特にZINE(自主発行の小冊子)のコーナーは、旅行好きの森田さんが、全国の書店や文学作品展示即売会などを巡ったり、カタログを取り寄せたりして、気に入った著者に連絡を取り、充実させているそうです。来店客から募ったエッセーを編集したZINE『漂流書簡』も発行・販売しています。

喫茶室では、コーヒー、紅茶などドリンクのほか、昔ながらの味わいの焼きプリン、生クリームを練り込んだミルクスコーン、季節ごとに変わるケーキや食事などのメニューも提供しています。

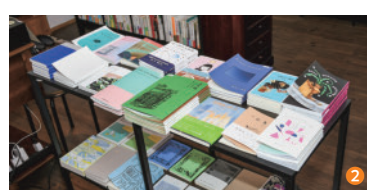
2025年5月25日の開店から、1年余りの間に、「こういう場所を始めてくれてありがとう」という手紙をいただくなど、想像していた以上に、一人で静かに過ごす時間を求めている方が多いのだと感じました」と森田さんは話します。営業時間外の喫茶室では、月に1度、さまざまな年代・職業の6人が集まりテーマを決めて語り合う「哲学対話の会」や、月に2回集まって日記やブログなどを自由に執筆する「もくもく執筆会」も開催しています。



「静かに自分自身と対話する時間を提供したい」と話す店主の森田さん



①新刊を中心に古本も置いている店内②全国から取り寄せたZINEのコーナー③視線を気にすることなく読書に没頭できる(上・下)④落ち着いた時間を過ごせるおひとり様専用喫茶室



店舗
案内

所在地 札幌市中央区南6条西14丁目1-12 ハザワマンション1F

営業日 毎週木～日曜日(SNS要確認)

営業時間 12:00～19:00

電話 011-522-5589

電子メール nomadbooks1901@gmail.com

SNS Instagram <https://www.instagram.com/nomadbooks1901/>

X <https://x.com/nomadbooks1901>

ブック・ストーリーズ
本づくりの
さきに
あること
——。

子どもの可能性を広げる 絵本読み聞かせ活動の 普及に取り組む

【こども未来with北海道 代表】

おおさわ としのぶ
大澤 俊信さん

外遊びでタンポポを摘んだ後、『たんぽぽ』の
絵本を読み聞かせると子どもたちの関心が
一段と高まると語る大澤さん

「こども未来with北海道」は、学校と家庭以外で子どもたちの居場所となっている子ども食堂などのサードプレイスに、絵本と絵本箱を寄贈しているほか、絵本の読み聞かせボランティアを養成する研修を開いたり、地域での多様な読み聞かせ活動を支援しています。2022年7月にこの組織を立ち上げた大澤俊信代表に、絵本の読み聞かせ支援を始めた経緯や今後の展望を聞きました。（文・写真／片山健一 取材日2026年5月26日）

サードプレイスなどに 60冊の絵本と本箱を

——絵本などの寄贈はどんな施設を対象にしていますか。

こども未来with北海道では、子どもが誕生してから小学校に入學するまでの6年間を、自分で考え、行動できる人間になるための大切な期間と位置付けており、絵本の読み聞かせを通じて、子どもの可能性と好奇心を引き出す環境づくりに取り組んでいます。

これまで活動の柱として、週に1回以上、定期的に読み聞かせ活動を行っている団体または施設を、地域の「サードプレイス・Meriy」として認定し、絵本60冊と絵本箱をプレゼントしてきました。

2023年7月、札幌市の市民団体「PLAY DO」に贈呈したのを皮切りに、同年12月には留寿都村の交流スペース「古民家コミュニティ」に、2024年4月には余市町の子ども食堂「よいちニコニコ食堂」、同年5月には札幌市の「空とぶペンギンの会 豊滝」、2025年5月には札幌市のNPO法人「E-LINK」と、これまで道内の5つの団体や施設に絵本と絵本箱を寄贈しました。2026年度からは、絵本などを寄贈する対象施設をサードプレ

イス以外にも拡大し、全道の保育所や幼稚園、市町村が設置した子育て支援施設にも贈呈することにしました。6月5日まで希望を募ったところ、2施設から申請がありました。ヒアリングを経て、贈呈先を決定し、7月以降順次届けていく予定です。絵本60冊の購入と絵本箱製作、絵本読み聞かせボランティア育成・支援費用を含めると、1団体への贈呈・支援に必要な原資は約20万円で、この資金は、企業や個人からの寄付金で賄っています。100セットを道内のサードプレイスや保育施設などへ贈呈することを当面の目標に掲げています。

非認知能力を高める 幼少期の読み聞かせ

——こども未来with北海道を始めるきっかけは。

私は、大学卒業後、人材育成をメインとするコンサルティング会社に

贈呈する
絵本 60冊と絵本箱



就職し、47歳で転職した先のリース会社でも新人社員の採用・教育を担当してきました。

入社を希望する若者たちを見てきて、特に深刻な問題だと感じたことが、コミュニケーションの前提となる語彙力の不足です。語彙力を獲得するための基礎づくりは、生まれてから小学校に入学するまでの期間が重要で、そのことが絵本の読み聞かせボランティア活動へとつながっています。

絵本の読み聞かせによって、人の話が聞けるようになり、絵本を通じた疑似体験と、実体験の総和で育まれる好奇心の醸成などに寄与し、意欲や協調性、自制心、コミュニケーション力といった非認知能力を伸ばしていきます。

しかし、いまの子育て世代は、核家族の共働き世帯が主流で、仕事と家事に追われ、子どもに絵本を読み



道庁で自治体職員向けに講演する大澤さん



大澤さんの読み聞かせや紙芝居に見入る親子

聞かせる余裕がなかなかありません。

私は、57歳で会社を早期退職し、2012年から故郷の当別町^{とうべつ}で両親が経営していたアパート業を引き継ぎました。2013年4月に、町内の保育所で絵本の読み聞かせボランティアに参加して、子どもたちが私の開くページの絵と声に集中し、読み終えると自然に拍手が起こったことが、うれしくて病みつきになりました。2020年には国立青少年教育振興機構から、絵本に関する高度な知識、技能、感性を備えた専門家として、絵本専門士に認定されました。2018年には、NPO法人ピヨルクとうべつを設立し、地域のサードプレイスとして子ども食堂の「白樺みんなの食堂」も運営していま

す。NPO活動の中で、食堂を訪れた子どもたちに読み聞かせをした後、近所に整備した「白樺緑地」で外遊びをして自然に触れ、もう一度同じ絵本を読み聞かせると、学習効果が一段と高まることを実感しました。

こうした経験を経て、全道の読み聞かせ活動を支援するため、2022年7月に有志4人で、こども未来with北海道を立ち上げました。

成長に応じた 選りすぐりの絵本を贈呈

— 寄贈する絵本はどのように決めていますか —

選書は、札幌市内の絵本専門店「ちいさなえほんや ひだまり」代表の青田正徳さんが行い、0〜2歳児には『いないいないばあ』『きんぎょがにげた』『はらぺこあおむし』など、3・4歳児には『おおきなかぶ ロシア民話』『ぐりとぐら』など、5・6歳向けには『かいじゅうたちのいるところ』『スーホの白い馬』など、長年にわたり読み継がれている、年齢別に応じた日本と世界の名作絵

本60冊となっています。また、基本となる選りすぐりの60冊のほかにも、北海道の自然や四季を感じられる120冊もリストアップしており、贈呈先が既に同じ絵本を持っている場合などは、差し替えることもできます。

— 絵本箱については

絵本を収納する絵本箱は、当別町産のトドマツ・カラマツを材料に、北広島市にある北海道白樺高等養護学校木工科の生徒たちに、年6台のペースで製作してもらっています。

贈呈先から提出してもらう
「Aレポート」の一部

絵本読み聞かせ＋自然体験 担当者/ボランティア Aレポート

年月日	2024 (令和6) 年5月9日	施設名	とうべつ白樺こども食堂
職員/ボランティア担当者	大澤俊信	対象者	0歳~2歳 3歳~4歳 5歳~6歳
読み聞かせ対象人数	4人	※自然体験者人数	4人
絵本名	たんぽぽ 平山和子ぶん・え	※自然体験場所	白樺緑地
最初の絵本の読み聞かせ場面のこども達の様子	「たんぽぽ していますか。」と絵本の初めの一文を読むと「知っている」と一人の男の子が声を上げましたが、後の3人は黙っていました。読み進めて特に絵本を握りて読む2頁のところは興味津々の表情でした。読み終えて「近くの白樺緑地に行ってみよう」と誘い出しました。白樺緑地の入口から入ると「あ、たんぽぽだ」と男の子が声を上げました。他の子もたんぽぽの周りに集まりました。「探ってもいいの？」と聞くので「大丈夫だよ、たくさん探って帰ろうよ」と話すと言、嬉しそうに探り始めました。20分くらいしてから、「そろそろ戻るよ」と声をかけると、楽しそうにたんぽぽを握っています。		
※自然体験場面のこども達の様子	こども食堂に戻り「さあ、もう一度、たんぽぽを読むよ」と絵本を開き始めました。4人とも手にたんぽぽを握りながら絵本に集中しています。「はなを よく みてみましょう。いっぽんのはなは、ちいさいはなのあつまりなのですよ」と、真剣にはなを見つめています。はなをひっぱろうとする子もいます。最後の「あなたのいえのちかくに、たんぽぽがありますか。さがし ましょう。おしまい。」と言うと「はい、たんぽぽがいます。さがし ましょう。」と答える子がいました。		
※自然体験後の二回目の読み聞かせ場面のこども達の様子	こども食堂に戻り「さあ、もう一度、たんぽぽを読むよ」と絵本を開き始めました。4人とも手にたんぽぽを握りながら絵本に集中しています。「はなを よく みてみましょう。いっぽんのはなは、ちいさいはなのあつまりなのですよ」と、真剣にはなを見つめています。はなをひっぱろうとする子もいます。最後の「あなたのいえのちかくに、たんぽぽがありますか。さがし ましょう。おしまい。」と言うと「はい、たんぽぽがいます。さがし ましょう。」と答える子がいました。		

2024年11月「HOKKAIDO WOOD」の認定を受けたことも大きな励みになっています。また、絵本箱の側面には大口の寄付をいただいた企業名などを入れたプレートを貼り付けています。

絵本の贈呈先には、読み聞かせを行うたびに「Aレポート」という報告書を提出してもらいます。レポートには、絵本のタイトルや読み聞かせた人数などとともに、読み聞かせをした時の子どもたちの様子、読み聞かせをしたボランティアの人たちが気付いたことなどを記録します。

当会を通じ、この報告書をほかの地域とも共有することで、選書領域や読み聞かせ活動の拡大につながると思っています。できれば、まちの広報誌などにも掲載してPRしてもらいたいと思っています。



絵本箱を製作している白樺高等養護学校の生徒

読み聞かせボランティアの育成が両輪に

——読み聞かせをするボランティアの育成はどのように行っていますか。

地域で絵本の読み聞かせを継続的に行うためには、絵本を贈るだけでは不十分です。忙しい両親に代わって絵本の読み聞かせをするボランティアを地域ごとに育成する必要がある、絵本の贈呈とボランティアの育成が読み聞かせ普及の両輪になっています。

当会が策定した研修プログラムは、読み聞かせに効果的なリズムや間、絵本のめくり方などを指導する120分の基本研修を行った後、個別に練習をしてもらい、後日開く90分のフォロー研修で、それぞれの練習の成果と課題を確認します。

実際に、読み聞かせの経験の無い大学生や高校生に研修を受けてもらったところ、すぐに読み聞かせができるようになりました。

研修は4人未満の少人数での実施を想定し、当会から講師を派遣することもできるほか、遠隔地でも研修を受けやすいよう、リモートにも対応しています。

加えて読み聞かせをする側にも新鮮な気付きや学びがあり、継続したいという動機につながります。



絵本寄贈先での読み聞かせの様子

地域の未来につながる子育て支援を

——地域での絵本の読み聞かせ活動に期待することは。

人は置かれた環境の中で学習し、成長していきます。特に0～6歳は周囲の環境に依存しているため、日本語を耳から心へと届けるという体験を、誰かが意図的に、継続的にしてあげないと、子どもが本来持っている可能性や長所を引き出すことはできません。

私は、子どもの可能性を引き出すことが、日本の未来に直結していると考えています。地域の総力を挙げて子育てに取り組むことで、優れた人材を輩出していければ、地域の魅



外遊び（自然体験）と絵本の読み聞かせが子どもの好奇心を育む

力増大にもつながると思います。

道内179市町村のうち、「ブックスタート」を行う自治体は128市町村に上りますが、絵本を配布するだけで、読み聞かせまでを支援していない自治体もあります。厳選した60冊の絵本を贈ることをきっかけに、読み聞かせが地域の中で頻繁に行われ、絵本の世界とリアルな自然との合体体験、手づくり絵本などの取り組みへと広がり、地域に根付いてほしいと願っています。

『お問い合わせ先』

こども未来 with 北海道

〒061-0233

石狩郡当別町白樺町6019

NPO法人ビヨルクとうべつ内

電話 0133-27-5006

電子メール kodomirai.with@gmail.com

HPアドレス <https://kodomirai-with.jp/>

ほっかいどうの本

このコーナーは北海道の出版社から発行された本を社員が読み紹介しております。お近くの書店にない場合は発行先へお問い合わせください。特記以外は税込価格です。

マリモ大全

978-4-86721-188-2

若菜 勇 著
A5変型判 416頁 3520円
北海道新聞社 発行 011・210・5744



本書は著者である若菜勇先生が1991年にマリモの研究を始めてからの30年を超える軌跡が綴られ、阿寒湖のマリモをどのように保護していくのかについての指針が書かれています。

本書を読むと18世紀にマリモがスウェーデンの博物学者カール・フォン・リンネによって学名を与えられて以来、2000年代になるまで、仮説や通説ばかりで定説として確定しているものが少なく、マリモが生物学においてどのような生物なのか解っていないことに驚かされます。マリモが「神秘的生物」と言われる理由を実感できます。

阿寒湖のマリモと他の地域に分布するマリモは、何の要因により形状や大きさが違い多様化しているのか。阿寒湖だけが球状に成長し、且つ大きく育つメカニズムは何なのか、マリモの生態について、多くの方がなぜ、と疑問に思っていることについて、現段階での知見がまとめられています。また、この研究の最終目的である阿寒湖のマリモ保護活動の現状と課題についても述べられています。

(製本部 大谷茂夫)

本の力でまちづくり

—北海道恵庭市からの発信—

978-4-88115-460-8

小磯 修二 編著
四六判 246頁 1980円
中西出版 発行 011・785・0737



全国でも有数の「読書のまち」として知られる北海道恵庭市では、2001年に開始したすべての赤ちゃんに絵本を贈るブックスタート事業を皮切りに、2004年にすべての小学校の図書館に司書を配置、2013年には読書条例を施行するなど、全国でも先進的な読書政策を行っています。

本書では恵庭市の読書政策を地域における「政策資源」として位置づけ、文化創造都市の実現に向けて本の力をどのように活かしていくか、これまでの取り組みを振り返りつつ、本や読書をめぐる情勢や他の地域の事例を見ながら考察しています。

長年の取り組みにより育まれた読書文化は市民へ深く浸透し、「恵庭のごく当たり前のこと」として受け入れられています。今後は政策資源であるこの文化をどのようにまちづくりに活かすのかを考えるフェーズに来ており、本書では多様な視点からそのヒントが述べられています。人口減少など地方都市における様々な課題に対峙していくうえで、他の自治体においても道標となる内容です。

(東京営業部 松谷 萌)

札沼線 旅立ちの汽笛

978-4-8739-445-5

石丸 雄理 著
A4変型判 80頁 2750円
共同文化社 発行 011・251・8078



2020年5月6日。札沼線の北海道医療大学駅—新十津川駅間が廃止され、その長い歴史に幕を下ろしました。本来であれば多くの人々に見送られるはずだった最後の日。しかし、当時は新型コロナウイルスによる緊急事態のさなか。沿線に集う人々の姿はなく、最終列車は静かにその役目を終えました。

本書は、そのような特別な状況下で記録された札沼線の勇姿を収めた写真集です。「最後の瞬間を見届ける」という著者の強い想いのもと、消えゆく鉄路と沿線の風景、そして列車が残した記憶を丁寧に写し出しています。

ページをめくるたび、北の大地のどこか遠くから汽笛が聞こえてくるような情景が広がり、読者をあの日の札沼線へと誘います。さらに本書は、長年鉄道写真を撮り続けてきた著者にとって、鉄道写真家人生における最後の写真集でもあります。一つの路線の終焉と、一人の写真家の集大成。その両方が刻まれた、貴重な一冊です。

(クリエイション部 外山 進)

新刊情報

書名の下に数字は日本図書コード（ISBN）及び雑誌コード。特記以外は税込価格。
お近くの書店にない場合は発行先へお問い合わせください。

新夏山ガイド5 道南・胆振

長谷川 哲 著
B 6判 256頁
2640円

北海道 大人の日帰りスポット 2026―27

花岡 俊吾 著
A 5変型判 288頁
2200円

第2版 新夏山ガイド1 道央

長谷川 哲 著
B 6判 304頁
2860円

北海道 Oh! 低山ガイド30

長谷川 哲 著
A 5判 152頁
1980円

道新プラス 道新受験情報 2027 大学・短大特集

北海道新聞社 編
B 5判 236頁
990円

北海道新聞社

〒060札幌市中央区大通東4丁目1番11号
011・210・5744

北大と北大生の150年

北海道大学150年史編集室 編
A 5判 160頁
2970円

日本産ハバチ類幼虫生態図鑑

原 秀穂・篠原 明彦 編著
B 5判 420頁
26400円

北海道大学出版会

〒000札幌市北区北9条西8丁目
011・747・2308

北海道近代史へのまなざし

桑原 真人 著
A 5判 270頁
5500円

亜細亜社

〒060札幌市中央区南2条西5丁目
011・221・5396

追悼 國松明日香展

本郷新記念札幌彫刻美術館 編
A 5判 160頁
2200円

中西出版

〒007札幌市東区東雁来3条1丁目1番34号
011・785・0737

農業法人指南書

齊藤 義崇 著
B 5判 108頁
1980円

世界の乳牛改良現場から

2025年版ホルスタイン・データファイル付き
デーリイマン編集部・編
A 4判 212頁
3630円

デーリイマン社

〒000札幌市中央区北5条西14丁目
011・209・1003

渡り鳥を夢見たカラス

茂呂 芳年 著
四六判 204頁
1980円

イグノーベル賞受賞！

オスメス逆転昆虫トリカヘチャタテの研究

吉澤 和徳 著
A 5判 44頁
1100円

万葉語らひ草

森山 弘毅 著
四六判 194頁
2200円

寿郎社

〒007札幌市北区北7条西2丁目
011・708・8565

加賀前田家の名刀

公益財団法人前田育徳会 編
酒井 元樹 監修・執筆
A 4判 60頁
1980円

土田 映子 著
四六判 320頁
2860円

両性具有神の恋

土田 映子 著
四六判 320頁
2860円

2026年版 できる合格

給水装置工事主任技術者 過去6年問題集
諏訪 公 著
A 5判 416頁
3850円

体育の急所
哲学・法学からの問いかけ
山口 裕貴 著
A 5判 224頁
1980円

体格の急所

山口 裕貴 著
A 5判 224頁
1980円

虫と人と環境と 第3集

岩佐 光啓 著
四六判 146頁
1000円

札沼線 旅立ちの汽笛

石丸 雄理 著
A 4変型判 80頁
2750円

復活蒸気機関車 いにしえの面影

古澤 成博 著
A 4判 108頁
3080円

共同文化社

〒003札幌市中央区北3条東5丁目
011・251・8078

紙のたび

客船「小樽港第3号埠頭」
相澤 幸子
木版画 35.5センチ×49センチ

住んでいる小樽市の広報紙を読んでいた
ら、クルーズ船寄港予定一覧を見つけた。

小樽港の第3号埠頭が改修され、小樽駅
から真っ直に下った、こんな近い場所であ
華客船を見ることが出来る（乗って世界一
周している人もいるのに）。こんなチャン
スはないと予定表に合わせて色々なクルー
ズ船を見に通った。

若い頃、数えきれないほど乗った青函連
絡船を皮切りに船は大好き。今でも舞鶴行
きのフェリーでさへ上船するとワクワクする。

クイーン・エリザベスを見た日は生憎の
天気。しかし黒くてどっしりとした船体に
英国式の伝統と格式の高さを見せつけられ
たようでもあった。

GEM木版画会 会員 小樽市在住

2026年7月15日発行 編集 ■ 季刊アイワード編集委員会 発行 ■ 株式会社アイワード 〒060-0033 札幌市中央区北3条東5丁目5番地91 ☎011・241・9341



※季刊アイワードのバックナンバーを
弊社ホームページよりご覧いただけます。
URL <https://iword.co.jp>